

1. はじめに

先日、三谷の奥(大和川源流地)付近できれいなヤマモミジの紅葉があり、果実(プロペラ状の翼果)が話題になった。手が届かないとはいえ、どこから見ても果実(プロペラ状の翼果)が見当たらなかった。あるならばそれを拾って植えてみたいとの期待からの発言だった。

以前にある書物でムクロジ科(カエデ科)は雌雄異株だと説明されていたのを見ていたので、そのあとすぐに、本日見たヤマモミジは雄株で、たとえ花が咲いたとしても種子はつけない株だからだと断定して納得して帰宅した。

しかしこの雌雄異株という情報が間違ったものであることが分かった。ムクロジ科はすべてかどうかはわからないが、イロハモミジをはじめとして雌雄同株で、実際は一つの花序に雄花と両性花の両方をつけるので、翼果は実る可能性があったということになる。なぜ果実(プロペラ状の翼果)が見当たらなかったのかの謎は残ったままである。

2. 樹木の雌雄性

(1) 有性生殖器官としての花には、両性花・雄花・雌花の3つがある。この3つの多様な組み合わせができる。

- ① 両性花のみ……………最も多い。
- ② 雌花+雄花……………2番目に多い。
- ③ 両性花+雌花……………珍しくない。
- ④ 両性花+雄花……………珍しくない。カエデ類はこれである。
- ⑤ 両性花+雌花+雄花

(2) 両性花…一つの花に雄しべと雌しべ、子房を持つ花で、種子植物には普通にみられる。雌雄同花ともいう。

両性花は自家受粉を避けるため、雄しべ先熟、雌しべ先熟のような現象がみられる。

(3) 雄花・雌花…単性花で一つの花に雄しべのみの雄花と雌しべだけの雌花を咲かせる。雌雄異花

(4) 雌雄同株…雌雄両方の単性花を持つ。雌雄異花同株 一個体に雄しべ、雌しべの花が両方存在する。

(5) 雌雄異株…雌雄どちらかの単性花のみを持つ。一個体には雄しべ、雌しべのどちらか一方しかなく、雄しべの花と雌しべの花は別個体に存在する。

3. 果実と種子について

(1) 果実…子房(雌しべのつけね)がふくらんで大きくなったのが果実。雌しべに花粉がつくと子房が膨らみ、果実になっていく。

(2) 種子…子房の中の胚珠が熟したものが種子で、子孫を増やすためのもの。(お米はイネの種子の胚珠)

種子は子葉、幼根(この二つが胚)、胚が育つための栄養としての胚乳の3つからできている。

種子は皮(種皮)に包まれているので乾燥や温度などに対応ができるシェルターのようにになっている。

花の咲かない植物(シダやコケなど)は種子を作らない。

(3) 液果…熟すにつれて水分を含むようになる果物…リンゴ、モモ、カキ、ブドウなど

食べる場所は子房の膨らんだもので、その内側に種子がある。リンゴは花たく部分を食べる。

(4) 乾果…熟すにつれて水分を失い、乾いてくるもの…クリ、クルミなど…クリの食べているところは種子で、むいてしまうところが果実である。ちなみに穀物は乾果である。

4. イロハモミジの花と翼果について

(1) 4~5月に暗紅色の花が垂れ下がってつく。雄花と両性花である。両性花の子房には短い翼がある。雄しべは8個でヤクは黄色。

(2) 果実は花後の5月ごろには大きくなり、翼果は2つの種子が竹とんぼのように水平に開いて、褐色に熟す。

(11月ごろ)これがプロペラのようにくるくる回転しながら親木から離れたところに運ばれる。

5. 今回の学習に当たって、いろいろな文献に当たってみたが、果実というべきところを種子と表現しているものの多さが気になった。カエデ類の翼果は果実であって、種子ではないのが正しい表現である。